――新刊紹介――
菊池清明訳『ガウェイン卿と緑の騎士』（春風社、２０１７年１２月）
擬古文混ぜ口語体の弁明
SGGK 翻訳文体について

西村公正

「*SGGK* の翻訳を終えた、四ヶ月後に出版社に渡すので校正を手伝うように」と菊池氏が原稿を送ってきた。まずは赤鉛筆を持たずに通読にかかった。

（1）一読後の穏やかならざる印象

トロイにありては包囲と攻撃が終わり
城市（みやこ）は崩れ落ち、燃え尽きて灰と塵（ちり）になりし後（のち）、
叛逆（はんぎゃく）の陰謀を働きし者はおのれの裏切り、

右の書き出しの四行を読んで、氏はこういう文体を選んだのだなと、これに、

正（まさ）しく背信（はいしん）の行為（わざ）により、裁かれたのである。

と続いたのでわたしは北杜夫の小説の題名にまつわる話を思い出した。『白きたおやかな峰』を三島由紀夫に贈るとすぐに北くん、〈白き〉は文語だよ、〈たおやかな〉は口語だ、〈白き〉なら〈たおやかなる〉だし、〈白いたおやかな〉にするべきだ、という旨の電話があったと、北杜夫が自身の随筆に書いてあった。

働きし者は、……／……裁かれたのである。

は、三島由紀夫流には文語と口語の入り交じりでの文体である。なお「文語（体）」の定義は『小学館国語大辞典』〈文語〉②の

日常の話し言葉とは異なった特色を持つ言語体系。特に、平安時代の語を基礎にして独特の発達をとげた書きことばをいう。

とするがこれは包括的な用語なので、これ以降は主に「擬古文」という用語を使いたい。

さらに読み進めると、

交互に起りては絶えることなし。　（19行）

この文は和漢混交文調である。

第四スタンザの bob and wheel は、（81―84 行）

宝石であった。
たぐい無く見目麗しきお后、
その薄青色なる瞳の優しのまなざし、
かほどの佳人の現し世に
かつてありきと誰言い得たるや。

wheel だけをみれば純粋な雅文体である（源氏物語には〈佳人〉こそないが漢語は少なからず使われる）。

結末のスタンザは（2518―2527 行）平易ながら和漢混交文の調子である。

爾来、かの帯を佩する者はいつの世にも崇敬の念をもって遇せられて久し。
このこと騎士物語の至高の作に語られたる、これを知らざる者無し。
斯くのごとくに、アーサー王の御代のかの不思議なる騒動の出来を、
ブリテン年代記は確たる事歴としてこれを明記せり。
トロイの包囲と攻撃の終結せし後、
かの勇者ブルトゥスがこの地を踏みしより、
確かに不思議なる出来事が幾多、
幾度と生じて尽きず。

わたしの作文の常識では、右に取り出した明確な区分のある文体を入り混じらせることは最も避けるべきことであった。ひと昔まえには「です／ます」（文体論の用語では〈敬体〉）と「である／だった」（同じく、〈常体〉）の混用すらも悪文とされた（丸谷才一の混用の評論文はその走りの一人である）。そこでわたしは菊池氏に一読の感想を述べてみたのであった。

（2）わたしの読後感と翻訳者の応答

右のことをふまえて、わたしは校正にとりかかるまえに手みぢかに、菊池さんにぶつけてみた。

― 擬古文（あるいは雅俗混交体）か、和漢混交文のどちらかでとおすのがよいと思いましたが？

・そのどちらかの文体で全二、五三一行を統一しては、読めたものではない。

―― それでは和漢混交文の調子のところでは、たとえば〈広やかなる丘陵の上に〉は柔らかすぎるから〈浩渺たる丘陵の上に〉といかにも漢文訓読調の語句を使うのはいかがですか？

・そういう、いかにも荘厳、といった調子にはしたくない。

わたしは、なおも文体の混用の戒めにとらわれていたので、樋口一葉の雅俗混交文と、鷗外のいわゆる和漢混交文をのぞいてみた。

春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、つゞいて秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶ事此通りのみにて七十五輌と数へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤蜻蛉田圃に乱るれば横堀に鶉なく頃も近づきぬ、朝夕の秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懐炉灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそゞろ哀れの音を伝へるやうに成れば、四季絶間なき日暮里の火の光りも彼れが人を焼く烟りかとうら悲しく、茶屋が裏ゆく土手下の細道に落かゝるやうな三味の音を仰いで聞けば、……（『たけくらべ』　青空文庫より）

今この處を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を呑みつゝ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁を含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我心の底までは徹したるか。（『舞姫』　青空文庫より。右、いずれも漢字は新字体にした。）

菊池さんの言うとおりで、これで *SGGK* 全体を貫いては、やはり古色蒼然として読むに堪えないものになる。

その用語についてついでに触れておくが、和漢混交文といわれる右の鷗外ですら、〈いかにも荘厳〉なるものはない（文体としては高橋義孝氏は「漢文調と和文調を巧みにないまぜた斬新な雅文体」と言う――新潮文庫の『『阿部一族・舞姫』について』）。厨川文夫氏の『ベーオウルフ』も冒頭行に〈御稜威〉（〈みいつ〉のふりがなは和語）で現代の読者を驚かせはするものの、いかにも漢籍から取り出したという語句はないと言ってよい。〈積薪〉くらいであろうか。〈邊彊〉は新字体では〈辺境〉にすぎない。正字体の漢字こそ並ぶが、これはふりがなの和語に当てたものである。

とは言え、なおも文体の統一にこだわったのは、菊池さんが二〇一四年の論文集に見せた『カンタベリー物語』「総序」（I-12 行）の雅文体の訳文を知っていたからである。

四月来たりて　やさしき香り立つ驟雨一過
干からびたりし三月の大地の根の元まで浸みとおり
葉の脈の限りひとつひとつまでも潤せば
ああ、ありがたや花々もほころびて咲き零るる
西より流るる風　ゼフィルスのその芳しき息に吹かるれば
おちこちの林や木立の柔らかき木々の芽も吹く

若やかなる日輪　天の白羊宮半ばにめぐり来たる頃には
夜もすがら目も閉じず
小鳥ども調べよろしく囀りわたる
―かくも小鳥の心をくすぐるは、自然の働きか―
折りから人々こぞりて巡礼をこいねがう　（今回の翻訳の「注解」に採録――p.159）

こういう調子で *SGGK* を日本語にしてもいいではないのかと思う気持もあった。そこでいよいよ漱石の『薤露行』の文体をみることを思いついた。漱石が過去にマロリー *Morte d'Arthur* とテニスン *Idiyls of the King* を読んでいたところから〈小説に近いもの〉に書いてみようとしたものである。テニスンについては

優麗都雅の点において古今の雄篇たるのみならず性格の描写においても十九世紀の人間を古代の舞台に躍らせるようなかきぶりであるから、かかる短篇を草するには大に参考すべき長詩であるはいうまでもない。元来なら記憶を新たにするため一応読み返すはずであるが、読むと冥々のうちに真似がしたくなるからやめた（『薤露行』の前書き――青空文庫より、以下同じ）。

と言うのだが、わたしの記憶では優麗なる雅文であった。

（3）『薤露行』の文体を見る

第二段落の冒頭を見てほしい。

薄紅の一枚をむざとばかりに肩より投げ懸けて、白き二の腕さえ明らさまなるに、裳のみは軽く捌く珠の履をつつみて、なお余りあるを後ろざまに石階の二級に垂れて登る。登り詰めたる階の正面には大いなる花を鈍色の奥に織り込める戸帳が、人なきをかこち顔なる様にてそよとも動かぬ。ギニヴィアは幕の前に耳押し付けて一重向うに何事をか聴く。聴きおわりたる横顔をまた真向に反えして石段の下を鋭どき眼にて窺う。濃やかに斑を流したる大理石の上は、ここかしこに白き薔薇が暗きを洩れて和かき香りを放つ。君見よと宵に贈れる花輪のいつ摧けたる名残か。しばらくはわが足に纏わる絹の音にさえ心置ける人の、何の思案か、屹と立ち直りて、繊き手の動くと見れば、深き幕の波を描いて、眩ゆき光り矢の如く向い側なる室の中よりギニヴィアの頭に戴ける冠を照らす。輝けるは眉間に中る金剛石ぞ。
「ランスロット」と幕押し分けたるままにていう。天を憚かり、地を憚かる中に、身も世も入らぬまで力の籠りたる声である。恋に敵なければ、わが戴ける冠を畏れず。（正自体は新字体に）

ご覧のとおりの美文文語体です。江藤淳さんもその博士論文で『薤露行』を雅文体と言っています。

第三、四段落を読みましょう。

「ランスロット」と幕押し分けたるままにていう。天を憚かり、地を憚かる中に、身も世も入らぬまで力の籠りたる声である。恋に敵なければ、わが戴ける冠を畏れず。

「ギニヴィア！」と応えたるは室の中なる人の声とも思われぬほど優しい。広き額を半ば埋めてまた捲き返る髪の、黒きを誇るばかり乱れたるに、頬の色は釣り合わず蒼白い。

傍線で示すべきでしたが、それをしませんけれど読者で気づいてほしい。冒頭あたりで早くも〈籠りたる――声である。〉、〈優しい。〉、〈黒きを誇るばかり乱れたるに、……蒼白い〉。と、口語体を混ぜている。これが、明治三八年（『中央公論』誌上）の発表作品で、書き飛ばしたものではない。『薤露行』を書いた苦労について高浜虚子には「薤露行抔の一頁は猫の五頁位と同じ苦労がかかる」という文のある手紙を遣っている。

明治の末ころに漱石は、口語体混ぜ雅文体を試みているのです。全体的に見ます。

（３ イ）文末術語

句点（。）単位では約五七〇文あり、そのうち文末述語が明確に文語体のものが四五二文であるから、比率にして約二十％の文末述語には口語体を用いている。

（３ ロ）述語にいたるまでの文体

文末述語を除けば、すべて文語体である。ただし、動詞には音便形にして口語的にも響くようにしているものが十三語ある。

例：脱いで（↑脱ぎて）、向って（↑向いて）、叫んで（↑叫びて）、

この『薤露行』の結文は

十三人の騎士は目と目を見合わせた。

なのである。そこでこの文体を〈口語体混ぜ雅文体〉と称したのは正しくなかった。文体の名称ではないが〈口語体に雅文を載せた〉と言えばいいかも知れない。

ともかく漱石は明治後半期に、美文の文語体に口語体を混ぜた文体の小篇を発表したことには注目しておくべきです。それにしても、『漱石全集』（昭和四十一年版）の解説で小宮豊隆も『薤露行』の文体には言及していない。わたしは菊池さんの翻訳文体に当初持った違和感をどうするか――『薤露行』を通読してよかったと思う。それで漱石ものを探してたまたま大岡昇平氏『小説家漱石』（筑摩書房、一九八八年、p.15）には左の文があった。

文章は文語と口語と混じった、雅文体といわれるもので、いまのみなさんにはとても読めないでしょう。私の世代でもあまり楽ではなく、実際あまり味わいのあるものではないのですが、漱石は真面目に苦心したらしく、書簡で「書くのが苦しい」と書き、……

大岡氏は雅文体とはいっているものの、〈文語と口語の混じった〉と、正しい認識をしている。ここで、先に述べた〈常体〉〈敬体〉の混用をする丸谷才一氏の『文章読本』にあたると、これが大正十二年の山口剛の文章を引用して紹介しているのです。夏目漱石と山口剛

の意図は違うのだが、〈文体の混用〉という意味では、すでに大正時代までに存在していたのである。山口剛は採りいれられたが、『薤露行』文体はその後は現れていないと思う。

（4）菊池〈擬古文混ぜ口語体〉寸見

丸谷氏は先の書物の最後の章で現代日本語口語文の地味ぶりを嘆いている。

……文首から文末へ至つて素直に意味が流れてゆくだけの、あまりにも直線的な現代日本文に、多少の旋回と曲折を与へることになるかもしれない。体言どめや文語体、うんと砕けた口語的（コローキアル）な口調の混用だつて、さう馬鹿にしたものではないので、意外に効果がありさうな気がする。

さらに、わたしの弁明の援用として以下も引用したい。

第一に日本語ではほとんど常に述語動詞がおしまひにゆく。第二にその動詞は、現在形ならみな、「ある」、「言ふ」、「来る」などとuの音で終る。過去形ならみな、これは先程も記した通り、「あつた」、「言つた」、「来た」などと「た」で終る。文語文には過去の助動詞が、「つ」、「ぬ」、「たり」、「り」、「き」、「けり」と多様だったのに、口語体では「た」一つしかない。そして第三に、これも文語文では係り結びといふものがあったのに、口語文にはそれがない。そこでわれわれの文章は、ともすれば文末でせつせと同じ韻を踏みつづけるやうな単調さに陥りがちだし、その単調さは究極のところ、文章全体の平板さ、鈍重さ、眠気を誘ふ感じを作り出すことになる。

菊池さんの翻訳文体をわたしは〈擬古文混ぜ〉と称しているのだが、現代の日本人の言語生活においては擬古文に囲まれている。俳句短歌は擬古文のものがかなりを占める、新聞は職業的俳人歌人以外の俳句短歌蘭に毎週1頁をさいているのです。それにせいぜいが三十一文字だから、万葉集以来のものを、いくつかは暗唱できる、或いは聞いてわかる日本人は多い。これが〈擬古文混ぜ口語体〉作者には有利です。

［a］用語

その用語からみると、美文調になることを避けていることがわかる。衣裳や武具、室内装具は別にして、ことさらに荘厳華麗をほころうとする語句を使用していない。

翻訳者の好みの用語であろう、頻度の高い語句がある。

「耀（かがよ）う」「天（あま）が下（もと）」「現（うつ）し世」「互（かたみ）に」「なべて」「おしなべて」が読後の印象に残った。わたしには「互に」は現代口語で使われるのかは不明だが、『新明解国語辞典 第六版』は見出し語にとり「雅語的表現」と説明して、用例は百人一首にもある「契りきな――」である。

［b］古典語助動詞

氏はこの翻訳において文体の創出を意図しなかったと思う。ただ「まえがき」にある、

また、古英語以来の伝統的な頭韻による中世イギリスロマンスの原文の雰囲気を伝えるべく、擬古文調の表現を少なからず交えた訳文にした。

がその目的に過ぎなかったと、わたしは考えます。

祝宴は了(おわ)りぬ、ガウェインの卓を起ち離れし時たるや、
覚えずして、はや日は暮れなんとしていた。
司祭の一団が礼拝堂へ向かい、敬虔に務めるかの祝祭の晩課のために、
しきたり違(たが)えず、高らかに鐘を四方(よも)へと鳴り響かせる。(928–931 行)

ここの2行には完了〈ぬ〉、過去〈き〉の連体形、否定〈ず〉、完了＋推量〈なん〉を含む雅文調で、文末を「としていた。」で結び、後に続く十数行の口語文にすんなり溶けこんでいる。「了りぬ」と「暮れなん」は、日常で慣れてしまった口語の平板さを巧みに避けたものでしょう。口語だと「―た。」、あるいは「―てしまった。」にするしかない。源氏物語の左の文を口語にはどう訳されているか。

(紫の上は)
消えはてたまひぬ。(「御法」)

お亡くなりになった。(与謝野晶子)

お亡くなりになりました。(谷崎潤一郎)

お亡くなりになった。(小学館日本古典文学全集)

現代の読者に古典語助動詞〈ぬ〉の語感は理解されます。少なくとも大学入試センター試験に取り組む高校生が毎年五十万人いることが擬古文混ぜ口語体の味方をするでしょう。

[c] 韻律・枕詞

日本語詩文で韻律にあたるものは七五調だけであり、原文の韻律に従う翻訳は、これを試みない方がよい。丸谷氏を引く。

(頭韻は)現代日本語の散文では口調をなめらかにしすぎ、早口言葉めいた不自然さを伴ふので、用ゐられないのが普通である。『野火』のどこかにもし頭韻が見つかるとしても、それは読者の思ひすごし、過度の探索の結果にすぎないとわたしは考へる。(p.194)

なるほどわたしの思い過ごしであるかも知れないが、この翻訳を朗読してみると、ところどころで読み脚を軽快にするように頭韻と七五調に出会う。

かの兜(かぶと)には頑丈に壺釘(つぼくぎ)がつけられて、(606 行)
城は、芝地に築かれ、周囲は狩猟禁野と(767 行)

見れば見蕩れる雅やかなる若き奥方に、（970 行）
扉は閉じました、頑丈なる門も掛けました。（1233 行）

雲立ち上り、ほどなく暖かき驟雨となりて、きらきらとゆれては光る水滴、（507 行）
礼拝の後、奥方はこの騎士に見えんと、（941 行）
同座する者それぞれの位階にいかにもふさわしく、（1004 行）
数多の家臣を従えて乗馬の支度を整えた。（1133 行）

右の４行を七五調とみたのは確かに朗読したわたしの思い過ごしであるかもしれない、翻訳者は意図していなかったでしょう。意図していたならば、「ほどなく」に、「位階にいかにも」に工夫を加えられたはず。「乗馬の支度を」では、詩では普通であるように助詞を省けば字あまりを避けられる。わたしは校正でそのようなことをチラと校正に朱書した覚えがあるが、聞き入れられなかった。いかにも、という臭みというかイヤらしさを嫌ったようでした。

枕詞が二箇所に施されていますが、これはどうか通読なさってください。

（5）結びにかえて――仏文学者平岡篤頼教授の翻訳論

……私が翻訳者として目指してきたことはずっと同じで、語学的にできるだけ忠実でありながら、どうやって原作の文体の色気を日本語で再現するかということでした。私はあえて色気と申します。（中略）それはいわくいい難い何かで、文学の身体をつくるものとでも、言いましょうか。したがって訳文もまた、原文と等価とまではいかなくても、日本語の文学作品としてなんらかの色気を滲ませなければならないのです。（中略）要するに、文体というものですが、自然で飾りがないというだけでも済まない。目につかない程度の適度の化粧というのも必要です。それが話芸でいう間とか、志賀直哉のいうリズムというのか、丸谷才一のいうちょっとした気取りというものかもしれない。それは真面目な顔をしたユーモアとすれすれのものと思いたい。（平岡篤頼「最終講義 知る喜び 読む楽しみ 書く快楽」『早稲田文学』二〇〇〇年五月一日、p.101）

補記

一、道行助弘訳『サー・ガウェインと緑の騎士』では、wheel は雅文体、旧かな遣い、七五調であることを知人のご教示で知った。全体としては口語体散文訳である。

二、『薤露行』の半年前に、アーサー王伝説もの『幻影の盾』を発表しているが、美文調ではなく、ところどころに文語をはさむ程度である。